

道新電子版!

いつでも朝刊読めます!

スマホで!タブレットで!
パソコンで!紙面を丸ごと
読むことができるサービス、
「どうしん電子版」!
購読料プラス 0円



「どうしん電子版」は、道新
を月決め料金で定期購読して
いる方なら、無料で登録でき
る電子版会員限定のサービス
です。

お問い合わせは
0120-889-104



「あなたのために」

新得町立屈足南小学校長 高 充慶



令和最初の入学式。新一年生七名。新型コロナウイルスの影響で、来賓の皆様に見守られてとはなりませんでしたが、入学式を行うことができました。全校児童四十三名。児童の笑顔や歓声が戻ってほっと一息でしたが、四月二十日から五月六日まで臨時休業となりました。

学校では、議論を重ね対応を考えますが、すぐに情勢が変わり、話し合いのやり直し。合間に児童に配布する家庭学習を作成し、配ったとたんに分散登校。「何のための臨時休業?登校して大丈夫?」と思いつつ、職員一丸となって児童の安全確保に努めます。しかし、毎日変わる情勢への対応は簡単でなく、先の見えない暗闇を必死にもがき、疲弊していきます。職員が罹患すると、学校は集団感染となるので、絶対感染できないという重圧となります。市中感染となり、どこで感染するか分からず、不安に襲われます。ある意味、日本全体がそうか

もしれません。世界では、DVや虐待が増えているとも聞きます。最前線の医療従事者の苦しみは計り知れません。しかし、感謝の気持ちを表す取組も広がっています。欧州では「クラップ・フォー・ケアラーズ」という医療従事者らへ拍手を送ろうという取組が始まり、日本でも茨城県庁などで始まったそうです。帰宅できない医療従事者が宿泊できるホテルの手配や防護服の代わりの雨合羽の寄付など、具体的な対応も増えています。学校では、町内ボランティアの方から新年生に手作りマスクをいただきました。心がほっこり温かくなりました。

「もののけ姫」などでプロデューサーを務めたスタジオジブリの鈴木敏夫さんによると「人が鬱になるときは、自分のことばかり考えているとき」だそうです。「あなたのために」と考える方が自分の幸せ感が高まるといいます。自分が感染しないようにすることはもちろん、今、だれかのためにできることを考えてみることに幸せに過ごす第一歩となりそうです。

本

無送料

当販売所では様々なジャンルの書籍、雑誌、文庫、新書、週刊誌の定期購読など、ほとんど全ての出版物を確実にお取り寄せします。

今読みたい話題作! 欲しい本をお取り寄せ!

気軽にお問い合わせください。通販は送料がかりませんが当販売所は無料です。

※当店取り置きとなります。宅配サービスは致しません。

「ねっとわーく屈足」駐在所



佐口 賢人 巡査部長

No.1

「自転車の安全利用について」

自転車での走行が便利な季節となりました。自転車利用者は自転車は軽車両であり、乗り方を誤れば人の命を奪う危険なものです。

下記のことを遵守し、安全に利用するようにしましょう。



- ※自転車安全利用五則の遵守
 - ①自転車は車道が原則、歩道は例外
 - ②車道は左側を走行
 - ③歩道は歩行者優先、車道寄りを徐行
 - ④ルールを守る
 - ⑤飲酒運転・二人乗り・並進の禁止
- 夜間はライト点灯
交差点での信号遵守と一時停止・安全確認
⑤子供はヘルメット着用

道新四月号
ポケットブック
の御案内です。



▼4月号!!
お昼は麺でささっと
普段の昼ごはんは、ささっと手軽に済ませたいという人にピッタリなのが麺料理。うどん、そば、パスタ、中華麺、そうめん、米粉麺など、麺の種類別に15分以内で完成する簡単な料理を紹介いたします。

一部地域配布済み

次号予告
「町の鳥・野の鳥」
市街地でも見られる野鳥を「町の鳥」、主に郊外にいる野鳥を「野の鳥」と分類。写真やイラストで紹介。お楽しみに。

ねっとわーく屈足

ねっとわーく屈足電子版
ミニコミ紙「ねっとわーく屈足」が、パソコンやスマートフォンで動画も閲覧できます。
ツイッターも屈足の話一杯毎日更新!

じじ-akira1942

連続小説

完 走

赤池武臣

老いた母の顔が浮んできた。哀しげな貌をしている。
(馬ッ鹿野郎。こんな事ぐらいで、くたばってたまるか)

良太はまた走りだした。汚物を思いきり吐いたせいか、少し脇腹が楽になった。走りにもスピードが加わった。いままで鉛の足榴を掛けていたような両足に気が甦ってきた。

良太は祈るような気持でスピードを上げてみた。「ようし、その調子だ。その調子だ。無理するなよ。ゆっくりでいいんだ。いいか、ゆっくりだぞ。マラソンは来年もあるんだ。焦るな。焦らんで、ゆっくり行け」

三輪車の荷台で男が叫んだ。
「残り、あと二キロだ。頑張るんだぞ」
男がまた怒鳴った。
二キロといえばタイムにして十分少々だ。あと十分、あと十分。良太は心に秒針を刻みつけた。

前方に走者の姿はすでに無かった。だがこれで完走だけは出来る自信が湧いてきた。一キロも走ったのだろうか。それまで足を着くたびにキュツ、キュツと鳴っていた左足の蹠(かかと)の辺りに針を刺したような痛みが走った。

やがてその痛みは右足の腫にもきた。
「畜生ッ。今度は肉刺(まめ)だ」
「どうした。また腹か」
三輪車の男が怒鳴った。
良太は人さし指で足の蹠をさした。
「足ッ。足って・・・引きつりか?なにッ。肉刺・今度は肉刺か」男の溜息が聞こえた。
「どうだ。あと一キロ弱だが・・・頑張ってみるか・・・そうか、無理せず、ゆっくりな」
良太は、靴も靴下も脱ぐと三輪車の荷台に投げつけた。

幼い頃から良太は大方を裸足で過ごした。良太に限らず、皆裸足で育った。正直いつて今日のマラソンも良太は裸足の方が性に合っていた。

つづく